

高齢者の食生活に関する研究(2) 食品の摂取可能状況からの咀嚼能力のスコア化
大手前栄養文化学院 ○岡田真理子 大阪信愛女学院短大 田中順子 桜井女子短大
浅野恭代 南 幸 甲子園大 井垣厚子 箕面福祉保育専門学校 岡本洋子
関西医大 河村真木子 大阪府老人大学 福岡明美 甲子園短大 和辻敏子

(目的) 高齢者の食生活は自歯の欠損などによる咀嚼能力の低下により単調なものになりがちで、食べる楽しみを奪っている事が多い。咀嚼能力の評価は筋電図などの機器を用いて測定する方法や、ビーナッツ、チューインガムなどを噛んで評価する方法などがあるが、いずれも一般の高齢者には適用しにくい。そこで、アンケート調査による食品の摂取可能状況から、個人の咀嚼能力を点数化し評価する方法を試みた。

(方法) 平井らの開発した義歯装着者用の咀嚼機能判定票を参考にし、あわせて食生活状況に関するアンケート票を作成した。大阪市城東区、大阪府堺市、奈良県斑鳩町の老人大学参加者、計278人を対象に、1994年2月～3月に調査を行った。

咀嚼スコアの算出は、平井らの方法にしたがった。

(結果) 調査対象は男性59人、平均年齢73.6歳、女性218人、平均年齢72.3歳。自分の歯が20本以上ある人は24.9%であり、全部義歯(総入れ歯)の人は27.0%であった。咀嚼スコアは100がいわゆる満点で、何でも不自由なく摂取できる状態である。男性の咀嚼スコアの平均は87、女性は85であった。年代別では、男性の場合は60歳代の平均が88、70歳代、80歳代がいずれも86と、わずかに低下するが、女性では60歳代90、70歳代80、80歳代77と加齢に伴い顕著に低下した。自分の歯が20本以上ある人の場合は93と高く、咀嚼に不自由を感じる人は少ないが、数本残っている場合は全く無い人より、わずかではあるがスコアは低く、咀嚼に不自由を感じている事がうかがえた。